巻頭言

無用の用

鳥取県病院薬剤師会会長
森田　俊博　Toshihiro MORITA

若者世代を中心にコスパ，タイパ，メンパなど効率化を優先する和製略語が幅を利かせている。もちろん，限られた資源や人員のなかで最大限の効果を発揮するための効率化は重要である。しかし，行き過ぎた考え方は,時として物事の本質を見落とすリスクがある。そのことを薬剤師業務に関連した自験エピソードを基に伝えたい。

一例目は，実務実習の話である。実習中，ひどくつまらなそうにしている学生がいたので，「何か学生同士でトラブルでもあったのか？」と尋ねたところ，「自分はMR志望で，薬局や病院には勤めない。それなのに，11週もの間，調剤や服薬指導の体験に時間を費やすなんてムダだと思う。病院の指導担当者も忙しいのだから，実習記録の上手な書き方だけ教えたら良いのでは。」との返答だった。そこで，「実務実習はインターンシップではないから，業務の速さや記録文書の良否だけでは評価しないこと。個々の患者に安全で最良な薬物療法を提供するためには何ができるかという薬剤師の使命を追求し続ける姿勢を身につけてもらうために行っていること。」を伝えた。さらに，「MRになった時に役立つ情報，例えば，医師が処方設計する際の薬剤選択や用量決定の視点，薬の新規採用や治験，臨床試験の流れ，それらに薬剤師がどうかかわっているのか，などを知ることができること。それは非薬剤師MRに対して大きなアドバンテージになること。」を伝えた。その日以後，当学生は，積極的に実習に取り組むようになった。

二例目は，専門薬剤師の話である。外来および入院化学療法にかかわっている薬剤師の一人に，「特徴的な症例の記録をとっておいて，がん専門または認定薬剤師の取得に挑戦してみてはどうか。」とすすめたところ，「専門や認定資格をとったところで，業務内容や加算は変わらないのでは。資格などというものはマンパワーに余裕のある大病院に任せておけば良いと思っている。」との返答だった。残念ながら，当薬剤師が関連資格に挑戦することはなかった。確かに，時間と経費をかけて資格を取得しても表面的な業務や収入は大きく変わらないかもしれない。しかし，取得の過程で経験する網羅的な研修，症例記録，学会報告や論文作成は単なる知識獲得にとどまらず，巷に溢れる情報への鑑識眼を磨き，医療チームにおける提案力や貢献度の向上に繋がることは周知である。また，資格取得がキャリアアップのきっかけになることも多い。

「無用の用」は，2025年にノーベル化学賞を受賞された北川　進氏により注目を浴びた格言で，「一見役に立たないと思われる物や経験にも大きな役目がある」という教えを示している。私たち薬剤師業務の本質は「安全で最良な薬物療法を提供すること」である。そのためには，効率を犠牲にしてでも患者ごとに十分な評価・対応を行うことが肝要である。また，すぐに結果は出なくても，業務や薬物療法の改良に資する研究や継続的な知識修得にも努めなければならない。今後，調剤ロボットやAI薬剤師が，いかに進化しても，その上をいく最適解を求め続けることが私たち薬剤師の責務であろう。